

あゝなつかし遠^{とほ}ちの山かけ

四とせの月日なつかしく み空の星をながめては

指をりわがせ敷ふらん 門べに我^{わが}妹子^{むすめ}ながむらん

いや長きこんとしつき

花のわけばの月のかげ まなびの窓^{まど}のいそしみを

はやくも卒^{そと}てとくとくと 飛びても行かん里の家

はや行かんかのみ空

瀧

東くめ子

ほとばしるみなわに袖はぬるゝとも

よりにながめん瀧のしら糸

天の原仰けは高し雲間より

みなぎりおつる峯の瀧津瀬

亡友をおもひて

同人

夢のうちなきし歌聲ありしごと

うつくしかりき今はなき友の

我伯母上

しのぶくさ

我母方のをば上は、母上よりは妹にたはしまして、御歳は、四十
の上に二ツ三ツ出て、給ひぬれど、ほどよりはいと若やきてなん
見え給へりし。そは御子もち給はぬ故にやと思はる、我ははらか
ら多くして、幼き頃より伯母上の許にて、人となりぬるに朝夕、
誠の母にもまして、まめやかに我を愛し給へり。我くに出でん
時にも、返すくも諭し給ひけるやう、衣服調度は更にも云はず
女のたしなみは、かくあるべきものぞ、故郷の空をのみ、徒らに
なつかしむなよ、一度出でたらんからには、錦着ややは立歸るべ
きなと、こまくとしひき、かくて年毎の休みには、うから
やからの顔見るとを樂しみつゝ、歸省しぬ、そのほとは照る日かし
こき、夏の盛も、春風の和らかなるが如き、心ちするまゝに、
長き月日の過ぎ行くをも、知らずなん、別けて去年の歸省には伯
母上も健かにて、迎へ給ひ、我もうれしく、冷々しき夜のそゞろ
ありきなどには、いつもく伴はれき。
さる程に、八月の半、姉上の御いたつき、重くおはする。し告げ
來ぬ、驚きて姉上が行きて、夜盡心を盡してみとり参らせたり
その間十數日が程伯母上にめがれけるを、伯母上は姉上の御病、
いかにくと打案し給ひ、飲食廢臥も安からず在しきとぞ、かく
て珍らしきものなと、調しては、みどりせる我らにさへ、數里へ
たゝれる處より、送り給へり、さしも重かりし姉上の御心ち稍々
怠り給ぬれば、また伯母上の許にかへり行きて、かたみに喜ひあ